

## 18 世紀半ばのフランスにおけるクラヴサン音楽の新局面

——J-P. ラモアの「見せる手」——

高野 裕子

本研究は、「弾き手の技巧」と「聴き手の眼差し」という視点を通して、ラモアのクラヴサン楽曲の考察を試みたものである。第1項では、17世紀から18世紀初頭のフランス社会にみられた「オネットム」という理想の人間像を表す概念に関して述べ、いかに自らを第三者に対して「見せて」いたかということを明らかにした。第2項では、この「オネットム」という概念から影響を受けていた17世紀から18世紀初頭のフランス・クラヴサン音楽演奏に関して、サン＝ランベールやフランソワ・クーブランによる記述を通して考察を試みた。第3項では、以前のクラヴサン演奏法から一線を画しているラモアのクラヴサン演奏法に関して論じ、第4項ではその内容をふまえて、ラモアのクラヴサン楽曲における「見せる手」の考察を試みた。

その結果、ラモア以前のクラヴサン演奏法は、第一に「優雅さ」を重要視していることに対し、ラモアは手指の技巧性を重要視しており、第三者の目を楽しませようとしていることが分かった。これは、リュート音楽や「オネットム」概念から影響を受けていた以前のクラヴサン演奏法から脱却した最初期の例であり、同時に18世紀後半から台頭し始めるヴィルトゥオーゾの先駆者であったと言える。そして最終的に、ラモアによる「耳が受ける喜びを目でも分かち合う」という言葉を、18世紀のフランス・クラヴサン音楽だけではなく、鍵盤楽曲史の中でも大きな意味を持つものとして位置づけた。